学位論文要旨

生成要因とクライエントの影響からとらえた心理臨床家の臨床的価値観に関する研究
――ケース体験に着目して――

広島大学大学院教育学研究科
教育人間科学専攻　心理学分野

D153245　　眞鍋　一水

目　次

第1章　本研究の背景と目的

第1節　心理臨床家の専門性に関する研究

第2節　心理臨床家の臨床的価値観に関する研究の動向

第3節　専門性の熟達におけるクライエントとの関係とケース体験の影響に関する研究の動向

第4節　本研究の目的

第2章　臨床的価値観の内容，生成要因，クライエントの影響（研究1）

第3章　クライエントの影響に関係するケース体験の検討（研究2）

第4章　総合考察

第1節　本研究の成果

第2節　本研究の限界と今後の課題

引用文献

第1章　本研究の背景と目的

第1節　心理臨床家の専門性に関する研究

心理臨床家（セラピスト　以下，Th.）は，クライエント（以下，Cl.）への確実な援助行為や心理的援助を保証するため，専門性を高め続ける必要がある（鑪，2010）。また，Cl.に役立つ援助行為のためには，専門性と人間性が相補的に関係する必要があると指摘されている（土居，1991）。Th.が重視する態度やあり方に関する論考はいくつか認められる。例えば浅原・橋本・高梨・渡邊（2016）は，21 名の熟練 Th.へのインタビュー調査から，Th.個人の特性を含む個人的なあり方が専門活動と切り離せないことを指摘した。ガヴィニオ（2015）は事例研究を通し，Th.が有する“あり方”や Th.個人が臨床実践で何が最も重要と考えるかという「臨床的価値観」（Buechler，2004 川畑・鈴木監訳　2009）が，意図的に選ばれる学派や技法実践の原点で多くの Th.に共有されており，実践にあたる上で重要であると指摘した。

以上のように，理論や技法の実践に加え，臨床的価値観をはじめとする Th.自身のあり方が，Cl.への援助にあたるうえで重要であると指摘されている。しかし，Th.のあり方や臨床的価値観に関する実証的研究は数少なく，臨床的価値観を自覚的に持つことは困難である。なお，本研究では，先行研究を踏まえた検討が可能である臨床的価値観を取り上げる。

第2節　心理臨床家の臨床的価値観に関する研究の動向

Th.の臨床的価値観がどの程度明らかにされているのかを把握するため，「臨床的価値観」（clinical values）を含む先行研究を EBSCO と CiNii を用いて検索した結果，12 件が該当した。書評を除き臨床的価値観に関するものは論文が 1 件(Buechler，2012)と書籍が1件（Buechler，2004 川畑・鈴木監訳　2009）であった。第1に，Buechler（2004 川畑・鈴木監訳　2009）は，臨床実践において Th.の価値観や感情のバランス，喪失に耐える力な

ど，Th.個人の内的資源が治療に不可欠であると指摘した。第２に，Buechler(2012)は，臨床実践で何が重要と考えるかという臨床的価値観は，臨床実践と訓練に役立つと論考した。しかし，以上の先行研究では，臨床的価値観にどのような内容が認められるのか(以下，臨床的価値観の内容)や生成要因，臨床的価値観の変化は明らかでない。本研究では，臨床的価値観の内容，生成要因，生成後の変化を調査し，臨床的価値観の概要を検討する。臨床的価値観の定義は，上述の先行研究では明確に与えられていないため，本研究では Buechler(2012)とガヴィニオ(2015)の記述を参考に，「Th.個人が臨床実践を行う上で一番大切だと考えていること」と定義する。

第3節　専門性の熟達におけるクライエントとの関係とケース体験の影響に関する研究の動向

臨床的価値観が生成後も変化するならば，何が影響要因となりどのような影響を及ぼすのかを明らかにする必要がある。しかし，臨床的価値観への影響要因や具体的な影響を取り上げた研究は見られない。

Th.の専門性の熟達に対しては，Cl.との関係が影響要因となることを取り上げた研究がある。近藤・長屋(2016)は，多様な経験年数の Th.15 名にインタビュー調査を行い，職場，スーパーヴィジョン，ケースにおける関係性の観点から専門職アイデンティティの生涯発達を検討した。その結果，Cl.との関わりにおいて，初学者は Cl.との関わりの困難さを体験するが，関係が構築されるにつれ“心理臨床の姿勢”を学ぶことが示された。また，Casement (1985 松木訳 1991)は，自らの臨床経験から，Cl.から学ぶことで Cl.の理解が変わるなど Th.の治療過程が豊かになると述べた。以上より，Cl.との関係は Th.の専門性に対し援助の姿勢や Cl.理解を学ぶ影響を与えることがわかる。したがって，Cl.との関係は，臨床的価値観に対しても，臨床的価値観が援助により役立つよう変化する影響を及ぼすと想定される。なお，本研

究では Cl.との関係を，VandenBos（2007 繁桝・四本訳 2013）による「関係」の定義を基に，「Cl.との，互いの思考，感情，行動に影響を与え合う対人的な結びつき」と定義する。

次に，Th.の専門性の熟達に，ケース中に Cl.との間で生じた情動や感覚を伴う体験（以下，ケース体験）が影響要因となることを取り上げた研究がある。岡本（2007）は，Th.の職業的発達に関与する要因を明らかにするため，22 名の Th.にインタビュー調査を行なった。その結果，「心理職固有の悩みと問題」として，“クライエントとの関係”において“限界や無力感”，“傷つき”や“不安・緊張”を体験することを明らかにした。先に紹介した近藤・長屋（2016）も，熟練者が，無力感や「Cl との深い体験と敬意」などを体験することを示した。岡本（2007）と近藤・長屋（2016）の研究では，Th.の専門性の熟達に際しケース体験が影響要因となることは取り上げられているが，どのような影響を及ぼすのかは明らかにされておらず，臨床的価値観への影響は想定できない。なお，本研究ではケース体験を，岡本（2007）や近藤・長屋（2016）の結果を参考に，「Th.が臨床実践を行う中で生じる，Cl.に対する情動や感覚，気づき」と定義する。

第4節　本研究の目的

臨床的価値観についての実証的研究は乏しく，臨床的価値観の内容や生成要因，変化など，臨床的価値観の概要は明らかにされていない。本研究は，臨床的価値観について以下の点から実証的に検討し，臨床的価値観に関する知見を得ることを目的とした。研究1では，臨床的価値観の概要について，⑴臨床的価値観の内容，⑵臨床的価値観の生成要因，⑶臨床的価値観への Cl.の影響から検討する。研究2では，臨床的価値観への Cl.の影響が生じる際にどのようなケース体験が関係するのかを，⑴Th.のケース体験，⑵ケース体験と臨床的価値観への Cl.の影響との関係から探索的に

検討する。本研究を行うには，協力者の Th.が臨床的価値観を持ち多くのケースを経験している必要があるため，臨床心理士資格を取得して 15 年以上の Th.を対象とした。また，臨床的価値観の内容と Cl.の影響のデータを対応させて分析し，Cl.の影響の詳細も得ることができる質的研究法を用いた。

第2章　臨床的価値観の内容，生成要因，クライエントの影響（研究1）

目的　臨床的価値観の内容，生成要因，Cl.の影響を検討する。

方法　調査協力者と手続き：外的妥当性を確保するため働いている職域や理論的立場は限定せず，20 名（年齢 41～68 歳，*M*=53.1，*SD*=6.7）の協力者を対象に，1時間 30 分～4時間 50 分（*M*=163.8，*SD*=53.7）の半構造化面接を実施した。協力者の了承を得て全て録音した。協力者の臨床心理士資格の取得後年数は 15～28 年（*M*=21.1，*SD*=4.4）であった。**質問内容：調査①（臨床的価値観の内容）：**「臨床実践を行う上で一番大切にしていることを教えてください」。**調査②（生成要因）：**「一番大切にしていることのきっかけになった体験を教えてください」。**調査③（臨床的価値観への Cl.の影響）：**インタビューガイドを作成し，「臨床心理士の資格を取得して間もない頃（最初の5年），ある程度心理臨床の仕事に慣れてきた頃（次の5～10 年），その後熟練の域に差し掛かってきた頃（その次の5年以降）に，中断や終結を含め最も力をつけた，勉強になったと思う Cl.との体験を教えてください」「その体験は“臨床実践を行う上で一番大切にしていること”にはどの様な影響がありましたか」と尋ねた。質問項目は，心理療法の失敗場面に関する調査（岩壁，2008）を参考に，5つの領域（事例の状況，面接者の対応，対応の結果，面接者の体験，面接者が受けた影響）を設定した。 **データの整理：調査①・②：**インタビューの録音データから個人が特定されない逐語録を作成した。**調査③：**逐語録を作成し，協力者が語った事例を1つずつ5領

域に分けた。次に，領域ごとに要約文を与え具体例とした。要約文は事例や語りの特徴に着目し，語りの具体的な単語を含めた。 **データの分析:**データとコードとの参照を繰り返すことが特徴的である，定性的コーディング（佐藤，2008）を参考に行なった。具体例の類似性に注目して概念を生成し，概念間の類似性からカテゴリを生成した。また，概念間とカテゴリ間の違いが明確になるよう具体例や概念を入れ替え，各概念とカテゴリの特徴が明確になるように精緻化して最終的な結果を得た。信頼性を確保するため，分析結果を確認した分析協力者の意見を概念やカテゴリの命名に反映させた。 **倫理的配慮:**広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を受けた。

結果

調査① 臨床的価値観の内容:協力者 20 名から 23 の具体例が得られた。3名の協力者から複数の意味を含む回答があり，意味ごとに分割し具体例とした。分析の結果3つのカテゴリ（以下，カテゴリを《》で記す）を得た。**①《Cl.理解の深化》:**「Cl.理解を深めることを重視する」ことを意味し，5例みられた。**②《Cl.への働きかけ》:**「Cl.へどのようにして働きかけるかの方法を重視する」ことを意味し，6例みられた。**③《Th.のあり方》:**「援助行為の際の Th.の姿勢や態度など，Th.のあり方を重視する」ことを意味し，12 例みられた。

調査② 臨床的価値観の生成要因:生成要因について具体的な語りが得られなかった協力者6名は分析から除外し，残る 14 名から得た 14 の具体例を分析した。その結果3つのカテゴリを得た。**①《トレーニング要因》:**「授業やスーパーバイザーの言葉などが生成要因である」ことを意味し，4例みられた。**②《Cl.との臨床経験要因》:**「Cl.との臨床経験が生成要因である」ことを意味し，4例みられた。**③《Th.個人の性質要因》:**「自分自身の特性や信念が生成要因である」ことを意味し，6例みられた。

調査③ 臨床的価値観への Cl.の影響:協力者 2 名からは具体例が得られ

ず，18 名の協力者から得た 33 の具体例を分析した。その結果，Table 1 に示した3つのカテゴリを得た。**①《臨床的価値観の獲得》:**心理面接での Cl.の影響により新たに臨床的価値観を獲得したことを意味し，9例みられた。**②《臨床的価値観の調節》:**Cl.の反応により臨床的価値観を調節した，もしくは調節する必要を感じることを意味し，9例みられた。**③《臨床的価値観に基づく援助の意味理解》:**臨床的価値観に基づく援助が Cl.または Th.に与えた影響を理解したことを意味し，15 例みられた。**④分布の様相:**Table 1 に示したとおり，臨床的価値観の獲得のみを得た協力者が2名（A，N），調節のみが2名（G，Q），意味理解のみが6名（E，F，O，R，S，T）認められた。獲得と調節とを得た協力者が3名（C，D，I），獲得と意味理解とが3名（K，L，M），調節と意味理解とが1名（B），全てのカテゴリが1名（P）認められた。

考察

調査① 臨床的価値観の内容:いずれも Cl.への援助に役立とうとする内容であり，臨床的価値観は愛他的な価値観であることが認められた。また，得られた内容は心理臨床に関して書かれた知見（例えば下山，2003：田中，2002）と類似していたが，あくまで Th.自身の言葉で語られていた。したがって，臨床的価値観とは知見を学べば獲得できる性質の価値観ではなく，知見の学習と臨床実践とを行きつ戻りつしながら，知見を実感を伴って自分の言葉で言語化できることで獲得される価値観であると考えられる。

調査② 臨床的価値観の生成要因:過去の訓練経験や臨床経験，Th.自身の性質などが生成要因になっており，生成の時期は人により大きく異なると考えられる。ただし，生成要因に Cl.との臨床経験があることは語られるものの具体的な経験は得られない協力者も認められた。本研究は1つのきっかけを尋ねたため，Th.自身の資質や経験が関係し合った「自分史」（菅，2002）から臨床的価値観を生成したデータは得られなかったと考えられる。

Table 1

臨床的価値観へのクライエントの影響の分析結果と各概念の分布[1)]

カテゴリと定義	概念	定義	具体例	協力者[2)]	A	N	G	Q	E	F	O	R	S	T	C	D	I	K	L	M	B	P	合計
臨床的価値観の獲得 定義：新たに臨床的価値観を獲得する。	意識化	事例をきっかけにして，臨床的価値観を考えたり意識するようになること。	【Cl.が命をかけた深いものに届くような深い理解ができていなかったのだと気づき，“Th.が気づいていない深い心の世界があるのではないか”と常に考えるようになった】[3)]（C-2/5-9）[4)]		○										○								2
	学びや実感	事例を通して，臨床的価値を学ぶこと。	【子どもや人にとって，“自分が大事され優しくされるという尊重される経験は心の成長にとても大事”なのだと学んだ】（M-1/0-4）			○											○		○	○			4
	Cl.からの挑戦	Cl.に挑まれたことをきっかけとして，臨床的価値観をもつようになること。	【Th.が格好だけでセラピストをしているのではなく，“自己一致してCl.に寄り添えるのかどうか”Th.の自己一致の度合いを試されたと思う】（P-4/10-14）													○		○				○	3
臨床的価値観の調節 定義：Cl.の反応を受けて，獲得していた臨床的価値観を調節する。	修正と発展	臨床的価値観を修正する必要性を感じ，臨床的価値観が修正され発展すること。	【“Cl.を心理的に理解した上で寄りそう”ことは基本だが，“Cl.が現実的に動く必要がある際には現実的に動けるように向き合う”ことも必要だと学んだ】（P-3/5-9）												○	○	○					○	4
	揺らぎ	現在の臨床的価値観では援助が上手くいかず，臨床的価値観を修正する必要があるのかと揺れること。	【“アセスメントの上で寄り添っていればいい”のか，“あるいは現実的なところで対応しないといけない”のか，何が必要なのかよくわからず揺れている状況である】（C-4/15-19）												○								1
	失敗と振り返り	臨床的価値観をもって援助に当たっていたが結果としてCl.の力になれず，Th.の失敗を振り返り失敗の要因を理解すること。	【枠を超えて侵入されてくる感じに持ちこたえられず否定的な気持ちになってしまい，“Cl.に寄り添え”なかった】（G-3/20-24）				○	○								○					○		4
臨床的価値観に基づく援助の意味理解 定義：臨床的価値観に基づく援助がCl.あるいはTh.へどのような影響を与えたかを理解する。	Cl.の体験理解	臨床的価値観をもって援助にあたりCl.の力になれたことについて，臨床的価値観をもっていたからこそ力になれたことを認識すること。	【Cl.である母にとって，自分を安心して出せたり，“Cl.のやり方でいいと言ってもらえる場所がこの世界にあること”は，Cl.の助けになれたかと思っている】（T-2/5-9）						○	○	○			○				○	○	○			7
	功を奏した要因理解	臨床的価値観もって援助にあたった結果，Cl.にどのような意味がありCl.の力になれたのかを理解すること。	【看板を取って生身の人間としてCl.と面接室にいた時に，本当に“Cl.に寄り添えた”と思う】（P-4/10-14）							○		○	○								○	○	5
	Th.への影響理解	臨床的価値観をもって援助にあたりCl.の力になれたことで，臨床的価値観が強化される影響を受けること。	【限界を感じ仕事を辞めたいと思った時でも，“諦めない様にしたい”と思えるようになった】（R-1/0-4）							○		○								○			3
				合計	1	1	1	1	1	3	1	2	1	1	3	3	2	2	2	3	2	3	33

1） 以下，心理臨床家はTh.，クライエントはCl.で表す。

2） 臨床的価値観へのCl.の影響に言及した具体例を得られなかった協力者2名（H，J）は割愛した。

3） 各協力者の臨床的価値観にあたる語りは“”でくくり，分析の際に該当する概念の根拠とした語りの箇所にアンダーラインを引いた。

4） ()内のアルファベットは協力者のIDを表し，続く-の後の数字は報告された事例の番号，/の後の-を挟んだ数字は当該事例を経験した資格取得後年数の時期を表す。

調査③　臨床的価値観への Cl.の影響：①《臨床的価値観の獲得》：このカテゴリから，①Cl.は Th.に直接臨床的価値観を獲得させる影響を及ぼす，②Cl.は Th.に臨床的価値観を獲得する機会を与えるという，2つの獲得の種類が見出された。臨床的価値観は，生成要因と同様に，Cl.との関係の影響を受けても獲得されることが確かめられた。②《臨床的価値観の調節》：このカテゴリは，Th.が自分の臨床的価値観が臨床実践でうまく援助につながらず調節を必要とした，あるいは調節していることを示す。Th.は臨床的価値観が援助につながらない場合には，Cl.から臨床的価値観の調節を求められるような影響を受けると考えられる。③《臨床的価値観に基づく援助の意味理解》：このカテゴリには，臨床的価値観に基づく援助が Cl.に役立ったことで Th.の臨床的価値観が維持や強化される概念が含まれており，Cl.は臨床的価値観を維持・強化する影響を持つと考えられる。④分布の様相：臨床的価値観は Cl.の影響を受けて獲得・維持されるだけでなく，調節も加えられ，より援助に役立つように変化する価値観であることが明らかになった。

研究1では，臨床的価値観の内容，生成要因，Cl.の影響を実証的に検討した。臨床的価値観とは，専門知を学んだ Th.の Cl.への援助に役立とうとする愛他的な思いが，Th.の内的な資源から臨床的価値観として生じ，Cl.の反応を受けて援助に役立つよう変化することが示された。

第3章　クライエントの影響に関係するケース体験の検討（研究2）

目的　臨床的価値観への Cl.の影響が生じる際に関係するケース体験を検討する。調査④では，Th.のケース体験の内容を分析した。調査⑤では，それらのケース体験と，臨床的価値観への Cl.の影響との関係を検討した。

方法　**調査④：調査協力者と手続き：**研究1と同じ。　**質問内容：**調査③と同じ。　**データの整理：**調査③と同じ。　**データの分析：**調査③と同じ。

調査⑤:臨床的価値観への Cl.の影響と，ケース体験の集計表を作成した。また，特徴的なセルの典型的事例について，対応も含めて概要を提示した。

倫理的配慮:研究1と同じ。

結果

調査④　ケース体験の内容:協力者 20 名から得た 76 の具体例を分析し5つのカテゴリを得た。**①《わかる実感》:**「Cl.のことや面接で生じていることが，Th.に理解できること」を意味し，12 例みられた。**②《事例のわからなさ》:**「Cl.理解や面接での対応が Th.にはわからないこと」を意味し，10 例見られた。**③《援助できなさ》:**「Cl.に役立てていないよるべなさを抱くこと」を意味し，20 例みられた。**④《激しい陰性感情》**:「Cl.に対し激しい陰性感情を抱くこと」を意味し，19 例みられた。**⑤《陽性感情》:**「Cl.に対しポジティブな感情を抱くこと」を意味し，15 例みられた。

調査⑤　ケース体験と臨床的価値観への Cl.の影響との関係:ケース体験と臨床的価値観への Cl.の影響との集計を Table 2 に示した。《臨床的価値観の獲得》はケース体験《援助できなさ》に最も多くみられた（5例）。《臨床的価値観の調節》はケース体験《激しい陰性感情》に集中してみられた（6例）。《臨床的価値観に基づく援助の意味理解》はケース体験《陽性感情》に多くみられた（5例）。臨床的価値観の獲得と調節は突出して1つのケース体

Table 2

ケース体験と臨床的価値観へのクライエントの影響との集計表[1)]

ケース体験	臨床的価値観へのクライエントの影響[2)]		
	臨床的価値観の獲得	臨床的価値観の調節	臨床的価値観に基づく援助の意味理解
事例のわからなさ	1（A）	1（I）	3（B, E, S）
援助できなさ	5（C, D, I, K, L）	2（D, Q）	1（R）
激しい陰性感情	1（P）	6（B, C, D, G, P, Q）	2（L, P）
わかる実感	1（L）	0	4（F, M O, R）
陽性感情	1（M）	0	5（F, L, M, O, T）
合計	9	9	15

1） 網掛けは，臨床的価値観へのクライエントの影響の各カテゴリで，いずれかのケース体験が最も多くみられた特徴的なセルを表し，アルファベットは該当した協力者のIDを表す。

2） 臨床的価値観へのクライエントの影響は，研究1の結果を用いた。

験にみられたが，援助の意味理解は複数のケース体験に分布したことが特徴であった。特徴的な事例について，ケース体験への対応をアンダーラインで表し，概要を以下に記した。『』は Th.の言葉を，「」は Cl.の言葉を表す。

事例1：ケース体験《援助できなさ》に対し Cl.理解を深める対応をした結果《臨床的価値観の獲得》に至った事例　概要：児童養護施設の Cl.。過去実母のネグレクト。現在リストカットや解離で『構って欲しい』という甘えを表現。Th.は甘える Cl.に懐を広く接することができずに《援助できなさ（自己不一致に伴う困惑）》を体験。**対応：**Cl.の理解を深めようと努め，『この子は言葉以前の子なのだ』という心理学的理解を得たことで一緒にゴロンと寝転んで絵本を読んだりできるようになった。**影響：**『Cl.に対して，ごまかさないでちゃんと向き合おうと思っている』という臨床的価値観の獲得に至った。

事例2：ケース体験《激しい陰性感情》に対し連携して対応した結果《臨床的価値観の調節》に至った事例　概要：医療機関の Cl.。面接終了を告げると怒った人格になり窓から飛び降りようとする等し，面接時間が毎回4時間を超える状況。『帰りに院内で暴れられたらどうしよう』という《激しい陰性感情（恐怖や不安）》から面接時間の終了を切り出せない。**対応：**管理医や院内暴力の対応チームとも連携して他院へのリファーを切り出した。**影響：**『Cl.に向き合うことは必要だが，リファーを伝えるタイミングとその勇気を出すのが遅かったと反省した』と，Th.は臨床的価値観を調節した。

事例3：ケース体験《陽性感情》に対しするべき援助をしたことと並行で《臨床的価値観に基づく援助の意味理解》が生じた事例　概要：緩和ケア病棟の 20 代 Cl.。Cl.はただ「どうしたらいいですか」と Th.に問うた。**対応：**Th.は何も言えず，亡くなった Cl.との経験を話し『同じ経験をした人からしか学べないと思う』と応答。Cl.は「そうですよね」と言いその後はすっきりした表情。面接は Cl.の死を手伝う過程で，毎回が最後かもと思いながら継続。Th.は

まだ生きた Cl.に会えるのが楽しいという《Cl.への陽性感情（Cl.に対する嬉しさ）》を経験。**影響**:『これまで関わった他の Cl.との経験を伝授でき，自分の半生を Cl.に還元できた』ため Cl.と不全感なく別れることができたという，《臨床的価値観に基づく援助の意味理解（功を奏した要因理解）》を得た。

考察

調査④ ケース体験の内容:第1に，《わかる実感》と《事例のわからなさ》は正反対に位置するケース体験であり，Th.は Cl.のあるがままの姿に関心を持ち関わることが重要であると考えられる。第2に，《援助できなさ》と《激しい陰性感情》は実感が困難なケース体験であると考えられる。Th.が困難なケース体験を実感するには，Th.に困難なケース体験が生じることは自然なことであると理解することが重要であると考えられる。

調査⑤ ケース体験と臨床的価値観への Cl.の影響との関係:第1に，《援助できなさ》のケース体験が，Cl.理解の深化または Th.のあり方を重視する臨床的価値観を獲得する影響に関係することが示された（Table 2）。事例1から，《援助できなさ》のケース体験により，援助できない状況での Th.のあり方が問われることで，Th.は臨床的価値観を獲得することが示唆された。第2に，《激しい陰性感情》のケース体験が，臨床的価値観の内容は問わず，臨床的価値観の調節を求める影響に関係することが示された（Table 2）。事例2から，《激しい陰性感情》のケース体験は，臨床的価値観に基づく援助を圧倒して臨床的価値観に新たな視点を加え調節を求める影響に関係することが示唆された。

研究2では，臨床的価値観への Cl.の影響にどのケース体験が関係するかを検討した。第1に，《援助できなさ》のケース体験が臨床的価値観を獲得する影響に関係することが示された。第2に，《激しい陰性感情》のケース体験が，臨床的価値観の調節を求める影響に関係することが示された。

第4章　総合考察

第1節　本研究の成果

本研究の成果は以下の5点である。第1に，臨床的価値観の内容は，Cl.理解の深化，Cl.への働きかけ，Th.のあり方の3つが得られた（調査①）。第2に，臨床的価値観の生成要因は，トレーニング要因，Cl.との臨床経験要因，Th.個人の性質要因の3つが得られ，生成の時期は人により大きく異なることが明らかになった（調査②）。第3に，臨床的価値観への Cl.の影響は，臨床的価値観の獲得，臨床的価値観の調節，臨床的価値観に基づく援助の意味理解の3つが得られた（調査③）。第4に，以上の研究1の結果から，臨床的価値観とは愛他的で，学んだ知見を自分の言葉で言語化できることで生じ，Cl.の影響を受け変化する価値観であることが示された。第5に，臨床的価値観への Cl.の影響に関係するケース体験は次の2つが得られた（調査⑤）。1つ目は，《援助できなさ》のケース体験が臨床的価値観を獲得する影響に関係することである。2つ目は，《激しい陰性感情》のケース体験が，臨床的価値観の調節を求める影響に関係することである。

第2節　本研究の限界と今後の課題

本研究は，臨床心理士資格を取得して 15 年以上が経過した Th.を対象に臨床的価値観について検討した。質的研究の特性上協力者の属性（職域や理論的立場）を完全に統制することは困難であったため，属性と臨床的価値観の内容との関係の検討は今後の課題である。また，困難なケース体験への対応と臨床的価値観との関係は多くの事例を分析して検討する必要がある。最後に，本研究で得られた結果が多くの Th.にも共通するかどうかという一般化可能性は，今後仮説検証的に検討を行う必要がある。特に，本研究の成果は臨床心理士資格を取得して 15 年以上の Th.から得られているため，若手 Th.にどの程度応用可能かは検討を重ねる必要がある。

引用文献

浅原 知恵・橋本 貴裕・高梨 利惠子・渡邊 美加(2016). 心理臨床家の専門性とは何か――熟練臨床家による語りの質的分析―― 心理臨床学研究, *34*, 377-389.

Buechler, S.(2004). *Clinical values: Emotion that guide psycho-analytic treatment.* Oxfordshire: Taylor & Francis Group.
(ビューチュラー, S. 川畑 直人・鈴木 健一(監訳)(2009). 精神分析臨床を生きる 創元社)

Buechler, S. (2012). The desire to do something. *Contemporary Psychoanalysis*, *48*, 533-543.

Casement, P. (1985). *On learning from the patient*. London: Tavistock Publication.
(ケースメント, P. 松木 邦裕(訳)(1991). 患者から学ぶ 岩崎学術出版社)

土居 健郎(1991). 専門性と人間性 心理臨床学研究, *9*, 51-61.

ガヴィニオ 重利子(2015). スクールカウンセリングにおける精神分析的あり方について 心理臨床学研究, *32*, 683-693.

岩壁 茂(2008). プロセス研究の方法 新曜社

近藤 孝司・長屋 佐和子(2016). 関係性の観点からみた, 心理臨床家の専門職アイデンティティの発達 心理臨床学研究, *34*, 51-62.

岡本 かおり(2007). 心理臨床家が抱える困難と職業的発達を促す要因について 心理臨床学研究, *25*, 516-527.

佐藤 郁哉(2008). 質的データ分析法 新曜社

下山 晴彦(2003).日本の臨床心理学の将来――国際的視点を踏まえて―― 氏原 寛・田嶌 誠一(編) 臨床心理行為(pp.66-87) 創元社

菅 佐和子(2002). 石橋と「砂鬼」と紫苑の記憶 一丸 藤太郎(編) 私はなぜカウンセラーになったのか(pp.185-206) 創元社

田中 千穂子(2002). 心理臨床への手引き 東京大学出版会

鑪 幹八郎(2010). 心理臨床家の現況とアイデンティティ 鑪 幹八郎・名島 潤慈(編著) 心理臨床家の手引き〔第3版〕(pp.1-17) 誠信書房

VandenBos, G. R.(2007). *APA Dictionary of Psychology*. Washington, DC: American Psychological Association.
(ファンデンボス, G. R. 繁桝 算男・四本 裕子(監訳)(2013). APA心理学大辞典 培風館)